

展示・收藏品より

美を知る 278

企画展「稲穂の詩～秋田と米づくり～」

農具にも作業の知恵

すいよう

学芸館

県立博物館で28日から始まる企画展「稲穂の詩～秋田と米づくり～」では、昨年度寄贈を受けた秋田市出身の木版画家・勝平得之(1904～71年)の版画や、昭和20～40年代の農村を撮影した写真などを展示する。昔の米づくりについてイメージしてもらいたく、今回は当館所蔵の農具を紹介したい。

雪が解けて春になると、田起こしが始まる。そこで使われるのが鋤や鋤である。鋤は、使う人の体格や土の硬さなどによって柄の角度を変えるなどして作られていた。「鋤は半里(約2.5キロ)にしてその形態が異なる」と言われる。鋤の中でも風呂鋤(写真1)は、風呂を作る大工が台や柄

を削る仕事をしてきたことによる。由来する。風呂鋤は、風呂台に柄をほめ込み、先端に鋤先を入れる作りである。

踏み鋤(写真2)は、この原理を使って土を掘り起こす農具。木の幹を切って枝分かれした部分を利用した一本作りになっており、継ぎ目がないので丈夫だ。ただ、自然の木から取るため柄が真っすぐにならず、理想的な柄を得るのが非常に難しかった。

田植えには、型枠(写真3)を使った。昔は目測による手植えだったため、田植えした苗の列が曲がってしまうと草を取るにも不都合な上、光や風の通りが悪くなり、米の収量が増えない一因になった。そこで型枠を使って苗を植え付ける場所をそろえた。

秋になると収穫した稲束から籾を取る脱穀作業が待って唐箕は、翼車を回転して風を起こし、上部の漏斗から落下した。江戸時代の元禄年間に千歯抜き(写真4)が発明され、明治時代になると、足踏み脱穀機が作られるようになった。足踏み脱穀機(写真5)は、自転車で農道を通ったときに、垂れ下がっていた稲穂が自転車のスポークに当たって籾が飛び散ったことにヒントを得て作られたとされる。



写真6



写真7

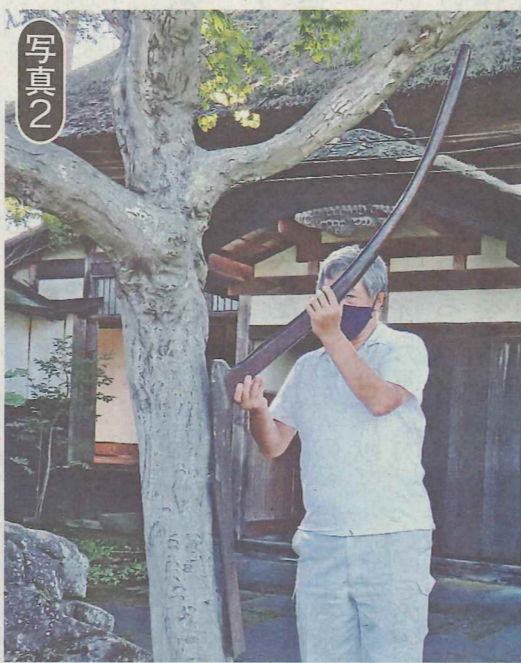


写真2

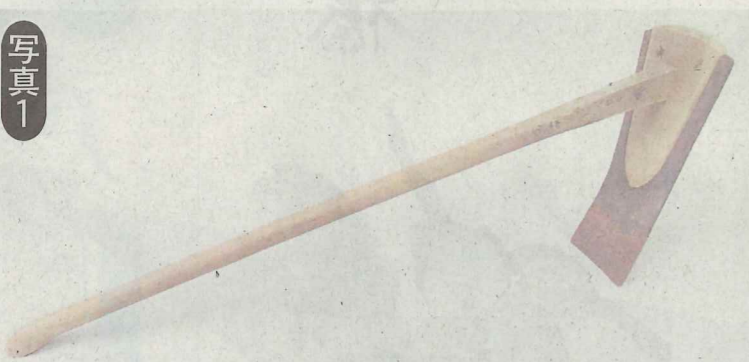


写真1

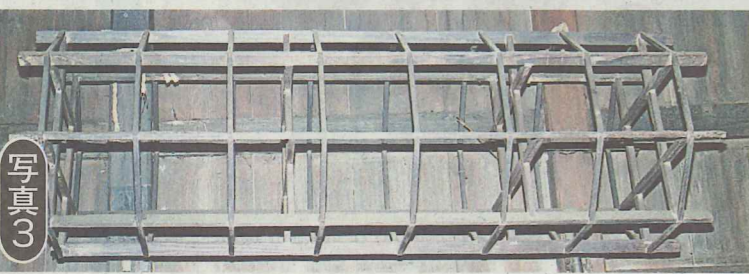


写真3



写真4



写真5

脱穀した後の藁は、捨てられずにさまざまな用具となった。横槌(写真8)を使い、藁をたたいて藁の茎を柔らかくし、節を押しつぶして節切れを防いだ。これによって藁全体が柔らかくなり、細工しやすい丈夫なものが作られることになる。その藁は飾り、縄類、草履やわらじなどの履物、蓑やケラなどの着物類、むしろやござなどの住まいの用具、米俵に使われた。

企画展を訪れた後は、当館の分館である旧奈良家住宅にも立ち寄り、農具や民具をご覧いただければ幸いです。

(県立博物館学芸主事・深浦真人)

【又E】秋田の米づくりの歩みと現在を紹介する企画展「稲穂の詩～秋田と米づくり～」は、28日から12月1日まで。開館時間は午前9時半～午後4時半(11月1日からは4時まで)。観覧無料。月曜休館(祝日の場合は次の平日)。県立博物館 ☎018・873・4121